

漢方トゥデイ



2022年4月7日放送

使ってみよう歯科口腔領域と漢方①

総論:なぜ歯科で漢方か

東京大学大学院 医学系研究科 イートロス医学講座

特任准教授 **米永一理**

(2024年4月より 日本大学歯学部 摂食機能療法学講座 主任教授)

私の担当致します漢方トゥデイでは、漢方初学者の方向けに、歯科口腔領域の漢方薬を使えるようになることを目的としてお話をしていきます。本日から数回に分けて総論をお届けし、その後各論をシリーズでお話しして行く予定です。

第1回は、『なぜ歯科で漢方か』と題し、歯科口腔領域でも漢方薬を把握しておくことの重要性をまとめます。

現在漢方医学関連では、148種類の漢方薬が保険収載されています。そして、歯科ではこのうち11種類の漢方薬が、薬価基準による歯科関係薬剤点数表に収載されています。一方で、皆さま方は、歯科口腔領域の診療でこれら11種類を上手く使用されているのでしょうか。漢方薬は西洋薬が広がる前は、急性期に使用するお薬であり、正しい使用法で用いると歯科口腔領域においても大変有用なツールとなります。

漢方医学というと、証を取ったり、虚实や、気血水を判断したりなど、なんか少し分かりづらくなっていうイメージをお持ちの方もいらっしゃるかと思います。けれども、今回は、そのような東洋医学的な診察の話を、まずはせずに、西洋医学的にどのように漢方薬を処方していけばいいか、つまり、診断をして、それに対してこういう漢方薬が使えますよというようなお

話しをして行きます。これにより、漢方薬は、意外と簡単に使えるんだと言うことを、ご認識頂けるのではと思います。

ではここから、正しい情報がみんなを救う～漢方薬の情報も知っておこう～と題してお話します。

正しい情報がみんなを救うとは、情報の把握、知識の把握が、医療作りになるということの意味しています。今まで歯科医療は、齲蝕、歯周病、不正咬合などの病気を治療することに集中すれば良かったです。しかし、超高齢社会となった現在は、様々な基礎疾患を抱えた患者様がたくさん歯科を受診するようになり、単に齲蝕、歯周病、咬合を作る治療だけをすればいい時代は既に終わっていると思います。

つまり、多職種連携をして、お口の中を整え、そして『食べる』ということを歯科医療者も如何に支えることができるかが重要な時代になってきました。そのためには、歯科医療知識だけではなくて、多職種連携をするための様々な情報を把握しておく必要があります。

そのためにも、われわれはプロとして、情報があふれている現代社会の中で、正しい情報が何なのかということ、患者さんや家族に伝えていく必要があります。この正しい情報が、みんなを救うことになります。

同様に、漢方薬に関しても如何に正しく情報を把握し、必要に応じて、使っていくことが大事になります。なぜなら、既に医学、薬学、看護学領域では、漢方医学教育が広く行われるようになってきており、多職種の中では漢方薬を含めた治療戦略が共有されつつあるからです。よって、歯科においても歯科口腔領域の漢方だけでも最低限把握していく必要があると思います。

そして、情報は、皆さま方の地域の情報と、テレビやネットで取得できる全国の情報が少し違うことも認識しておく必要があります。漢方薬においても、基本的な知識を身に付けた上で、各地域で、そして各連携体制によって、何が得意で、どういった処方傾向にあるかなども把握して行く必要があります。このような基礎的な知識と地域の情報の把握が、地域づくりに繋がっていきますので、皆さんもぜひとも実践して頂ければと思います。

次に、オーラルフレイルや口腔機能低下症の一手として漢方薬が選択できることをお話しします。

歯科においては、オーラルフレイルや口腔機能低下症が一つの大事な指標となってきました。オーラルフレイルとは『些細な口の衰え』であり、病気になってしまってから、何か対応するのではなく、病気になる兆候をつかみ、病気になる前に対応して行く必要があります。

このような時に、歯科としてどのような対応できるかといったことが大事になります。もともと歯科は伝統的に、予防歯科をはじめ悪化する前の対応を得意としています。そのような中で、皆さま方はこのようなオーラルフレイルや口腔機能低下症の患者さまがいた時にどのような対応をされているのでしょうか。意外と困ることがあるのではないのでしょうか。

勿論、口腔管理や口腔ケア、口腔リハビリテーションなどの手はあります。一方で、選択肢はそれほど多くないと思います。つまり、オーラルフレイルや口腔機能低下症など、折角概念ができて、把握ができるようになってきたにも拘わらず、対応方法が少ない状況です。

このような時に、漢方薬が選択肢に入ってきます。

ではここからは、健康寿命の延伸・幸福社会の実現のため歯科口腔領域からも『食べる』を支えようと題してお話します。

今後歯科口腔領域でも、今まで以上に『食べる』ことを体系的にみられるようになる必要があります。現在政府は、健康寿命の延伸、幸福社会の実現を目指しており、それに関連して、如何に苦痛の少ない生活を送れるかが課題となっています。そのような中で、人には疼痛、うつ、カヘキシアの3大苦痛があるとされています。このうち、疼痛やうつに関しては様々なガイドラインや治療薬ができてきており、それなりの対応ができるようになってきました。一方で、カヘキシアに関しては、まだまだ十分な対応ができていないとは言えません。このカヘキシアは食べられない状態が続く結果として起こります。よって、食べられないことは人の苦痛につながると解釈することができます。

また人には生きていくための最低限の欲求として、食欲、睡眠欲、排泄欲の3大欲求があります。この中で、睡眠と排泄は嫌でも行ってしまいます。どんなに我慢しても、いずれ寝てしまいますし、排泄物は出てしまいます。一方で、食欲は、唯一、自分で食べられなくなった際に、誰かに介助してもらわないと食べることができません。

実際厚生労働省が公表しているデータでは、2040年の年間予測として、食べられない状態が続くことでおこる低栄養患者が600万人、カヘキシア患者が200万人、死亡者が170万人とされています。これらから、私共はこの食べられない状態が続くことをイートロスとし、約1,000万人がイートロス状態になり、困ることになると予測しています。

このイートロスとは、フレイル、サルコペニアなどと関連し、今後多くの方への、介入が必要となることが予測されます。これらフレイル・サルコペニア・イートロスへの対応のためには、多職種連携の先にある医療と市民・住民、医療と市場・産業、医療と市政・行政の連携である医市連携がポイントとなります。よって、このことを見越し、歯口腔領域においても医療貢献の王道として、この『食べる』を支えられるようになる必要があります。

そのためにも、生まれ持った能力を生かすことを得意とする漢方医学の考え方が役に立ちます。つまり、漢方薬により皆さま方の診療の幅も広がるかと思えます。

ではお時間のようです。

今回は、『なぜ歯科で漢方か』をお伝えいたしました。少し漢方薬を知りたいと思う動機になって頂けたでしょうか。本シリーズでは、続けてお聞き頂くことで、漢方薬の楽しさをお伝えできればと思います。次回は、歯科医師国家試験でも2023年から漢方薬が出題される可能性があるため、『漢方医学における歯科口腔領域の現状』をお届けします。